

論文審査の要旨及び担当者

報告番号	(甲) 乙 第	号	氏 名	野 上 和 香
論文審査担当者	主 査	精神神経科学	三 村 將	
	先端研 (脳科学)	田 中 謙 二	小児科学	高 橋 孝 雄
	衛生学公衆衛生学	岡 村 智 教		
学力確認担当者 :			審査委員長 : 田中 謙二	
			試問日 : 2023年 2月10日	
(論 文 審 査 の 要 旨)				
論文題名 : Effect of Personality Traits on Sustained Remission Among Patients with Major Depression: A 12-Month Prospective Study (気質・性格がうつ病の寛解維持にもたらす影響に関する検討 : うつ病外来患者における前向き研究)				
<p>本研究では、うつ病患者のどのような気質・性格が寛解維持 (Sustained remission: SR) と関連するかを明らかにしようとした。77名の外来うつ病患者を対象に、うつ病の気質・性格評価票Temperament and Personality Questionnaire (T&P)を実施し、その後12カ月間追跡した。対象者を6ヶ月間寛解維持した者 (SR群) とそうでない者 (非SR群) に分け、各T&P気質・性格因子との関連を検討した。その結果、T&P気質・性格因子のうち、「人に内面を見せない」因子が寛解維持 (SR)と関連することが示された。</p> <p>審査では、気質・性格の評価はうつ病経過のどの時期に行われ、評価までの治療内容に差異があるかと問われた。T&P評価は研究登録時に行われ、罹病期間や治療内容は統制されていないと回答された。T&Pを選択した理由を問われ、T&Pが治療計画への活用が見込まれるためと回答された。就労状況分類についても問われ、社会機能の観点からカテゴリカルに分類されたと回答された。また、寛解率から鑑みて本研究対象がうつ病患者の代表性があるかと問われた。本研究は、大学病院や精神科専門病院が研究実施機関であること、および対象者のSRの割合は一般的な寛解率と比較し低めであることから、難治例が多く含まれていた可能性があるという報告があった。サンプルサイズ設定について問われ、サンプルサイズは研究実施可能性から設定し、本研究にて算出した検出力は約0.8であるため概ね十分なサイズであると回答された。また、非SR群でなくSR群について検証した理由を問われ、SRについて理解を深めることが社会機能の回復などの目標達成につながるという臨床的視点からであると回答された。気質・性格とうつ病の関係についても問われた。T&P因子はうつ病重症度の影響を受けないという報告がある一方で、気質・性格は長期的には変化するという報告もあり、先行文献でも相互の関係について明らかにすることは難しいと論じられていると回答された。内向性がうつ病の発症に影響を与えているかと問われ、先行研究での結論は一致していないと回答された。また、T&P因子がうつ病の発症リスク因子を表した可能性を問われ、本研究はうつ病を発症した者のみを対象としていることから対象は異なり、今後の検討課題としてあげたいと回答された。さらに審査では、研究結果をどのように臨床に活かすかと問われた。</p> <p>「人に内面を見せない」患者において、ストレス上昇リスクであるという心理教育や、診療場面では内面を見せやすくするコミュニケーションの工夫などの具体例が回答された。最後に、うつ病が寛解した集団を対象とする研究の可能性について問われ、今後の検討課題としたいと回答された。</p> <p>以上、本研究はさらに検討すべき課題が残されているものの、治療戦略に活用するという観点からうつ病の寛解維持への影響が示唆される気質・性格について前向きに検討した有意義な研究であると評価された。</p>				